

平成 29 年度第 4 回 吹田市高齢者生活支援体制整備協議会議事録

1 開催日時

平成 30 年（2018 年）2 月 21 日（水） 午後 2 時開会～午後 4 時閉会

2 開催場所

千里山コミュニティセンター 多目的ホール

3 出席委員

- 新崎 国広委員（大阪教育大学教育学部教育協働学科 教授）
清水 泰年委員（公益社団法人 吹田市シルバー人材センター 参事）
徳永 英明委員（株式会社ダスキン ホームインステッド吹田ステーション）
美馬 美知紅委員（特定非営利活動法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ
ナルク吹田（友遊悠）代表）
半崎 智恵美委員（NPO 法人 市民ネットすいた 理事）
藤原 俊介委員（山三地区自治連合協議会 会長）
宮本 修 委員（吹田市民生・児童委員協議会 副会長）
金戸 省三委員（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会 副会長・常務理事）
山本 清美 委員（吹田市介護保険事業者連絡会 居宅介護支援事業者部会 実行委員）
大谷 治 委員（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会 地域福祉課主査・広域型生活支援コーディネーター）
星野 洋子委員（市民委員）
新宅 太郎委員（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会 地域福祉課主幹（コミュニティソーシャルワーカー））
川口 紀子委員（吹田市岸部地域包括支援センター センター長）
今峰 みちの委員（吹田市福祉部高齢福祉室長）

4 欠席委員

- 中谷 恵子委員（吹田市ボランティア連絡会 副会長）
樋口 敬子委員（吹田市高齢クラブ連合会 事務局長）
富士野 香織委員（吹田市介護保険事業者連絡会 訪問介護事業者部会 部会長）
鈴木 和子委員（市民委員）

5 会議案件

- 1 開会
- 2 案件

- (1) 生活支援コーディネーターの活動報告
- (2) 前回の振り返り
- (3) 全体協議 地域の活動を拡げていくために
～具体的な地域へのアプローチについて～
- (4) その他
ア 「支え合いの地域づくりフォーラム」

- ～困った時は「お互いさま」の地域を目指して～（案）について
イ 吹田市高齢者生活支援体制整備協議会 愛称の検討について
ウ 来年度の協議会について

6 議事の経過

〔開会〕

〔資料確認〕

〔傍聴者の報告〕

事務局：

傍聴者は2名です。5名以内ですので、全員の方に入室していただいています。

〔委員長挨拶〕

委員長：

皆様お忙しい中、またお寒い中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

毎回ありがたいことに傍聴者の方がいらっしゃいます。これだけ地域づくりや地域福祉に関心の高い市であると実感させていただいています。今回も皆様ぜひ積極的な御意見をいただきながら、より良い体制づくりをしていきたいと思えます。

〔案件1：生活支援コーディネーターの活動報告〕

委員長職務代理者：

（資料1について説明）

① 豊一地区これからを考える交流会

- ・ 前は豊津・江坂ブロックで開催したが、今回は豊一地区のみで行った。
- ・ 「担い手確保のために介護支援サポーターを活用しては」という意見も出た。

吹一地区これからを考える交流会

- ・ 参加者24名。
- ・ 「課題を共有することが大切」「意見交換会に多くの方が参加したが、今後より色々な団体に関わってもらうことが必要」といった意見が出た。

山手地区これからを考える交流会

- ・ 2月24日（土）第3回目開催予定。

② 各地域包括支援センターとの意見交換会

- ・ 前は市内全域で意見交換会を行っていたが、今年度から各ブロックもしくは各地域包括支援センターごとに開催している。
- ・ 地域ケア会議では地域課題の解決に向けて話し合っているが、「専門職の視点のみになってし

まいがちなので、今後は地域の方の声を聞きながら課題を出して解決していくことも必要」という意見が出た。

③社会資源リスト「生活支援サービス編」の作成

高齢者の方が住み慣れた地域で安心して暮らせるように、社会資源の情報の整理や見える化を進めている。

④「支え合いの地域づくりフォーラム」に向けた準備

フォーラムについては後ほど案内する。

委員長：

広域型生活支援コーディネーターとして、市域での住民と地域の協働のコーディネート、また、専門職の多職種連携と住民をつなぐコーディネート、そして、情報収集と住民への情報発信という動きの御報告でした。

〔案件2：前回の振り返り〕

委員長職務代理者：

(資料2について説明)

前回の資料6に、前回出た意見や、それを受けて事務局と委員長職務代理者で出した今後の展開を追加した内容で資料2としました。助け合い活動の創出に向けて、全体協議で話し合いたいです。

(資料3について説明)

前回、集いの場リストについて「活動内容やテーマをもっと分かりやすくすれば、自分の参加したい活動が探しやすくなるのでは」という意見が出ました。その意見を受けて構成をし直したもので、JR以南ブロックの抜粋版を資料3としました。全ブロックについて構成をし直し、見やすいものにしていきたいです。

(資料4について説明)

前回の協議会の中で、「モデル的な活動や成功事例の活動を集めて今後の参考にしては」という意見が出ました。そのような事例を資料4の中で「集いの場」と「生活支援サポート」で分けて挙げています。⑤「ぶらっと庵」と⑥「お手伝いネット」の方には3月開催のフォーラムで登壇いただき、取り組みを紹介してもらおう予定です。

委員長：

資料3「集いの場リスト」が字ばかりなので、小さな写真など特徴的なものを入れてはどうでしょうか。ボリュームは増えてしまうかもしれませんが、大学のパンフレットでも、字が多いより絵や写真の多い方がアイキャッチが良いと言われています。集いの場で談笑していたり体操をしていたりする様子を一部でも入れると、手に取りやすいと思います。

資料4で、とても良い実践が書かれているのですが、字ばかりなので少し分かりづらいです。吹田はCSWが毎年報告書を作っているのですが、このように活動の動きや広がり絵で示すと、とても

良い実践をしていることが見えやすいと思います。

今峰委員：

資料 3 の最終ページについて補足です。これはまだ案の段階で、先程言われた見やすさなどについては見直しの余地があるのですが、市としても集いの場の分類が必要だということで、資料を付けさせていただきました。横軸が開催頻度、縦軸が参加の自由度として、誰でも参加できるのか、決まった人だけなのか、という分類をしています。一つ一つの場を分かりやすく紹介するのは委員長職務代理者が作ってくださっているので、加えて全体としてどういう種類のものが何か所あるということが一目で分かるように作ろうとしています。御意見があればいただきたいです。

委員長：

このページでは、行政がこういう取組をしているということをきちんと知ってもらうということにはとても効果的だと思います。地図上で種類ごとにマークを付けて番号を振るなどすれば、場所が自宅に近いからと参加してみる気になることもあると思います。

金戸委員：

集いの場がとても増えていて、私も勉強不足なのですが、自分の地区でこのリストに載っている団体でも実態を知らないものがあります。地域でも一部の人にしか知られていないのではと思います。これら集いの場を色々な場面でPRしていく必要があると思っています。

委員長：

地区の中でこのリストの報告会をするのも一つの方法だと思います。この件については次の案件で議論したいと思います。

藤原委員：

集いの場を地図にするという話でしたが、これらは福祉委員が開催しているものが多く、それぞれに予算をもってされているので、基本は小学校区に根ざしているものですし、行き帰りの事故等も考えると、他の方が参加されるのは難しいと思います。

委員長：

地図にするのも、地区ごとであれば有効ということですね。

〔案件③：全体協議 地域の活動を拓げていくために～具体的な地域へのアプローチについて～〕

委員長職務代理者：

(資料 5 について説明)

平成 28 年度、平成 29 年度の協議会の中で出た意見を「地域へのアプローチ」「全市対象」「共通」で分けて整理しました。

(別添資料について説明)

地域包括支援センターとの意見交換会で「地域の住民に提案をしても、0 から地域活動を始める

のは難しい。マニュアルとまではいかななくてもスターターキットのようなものを示す必要があるのでは」という意見が出ました。この資料では、これから集いの場を検討するという時に考えるべき課題を整理したフローチャートになっています。

委員長：

今回は二つの議論をしたいと思っています。一つ目は地域の活動を広げるためのアプローチについて、二つ目は担い手づくりについてです。繋がっているところもあると思いますが、まずは地域の活動を広げるための取組について御意見いただきたいです。

藤原委員：

資料5で「地域へのアプローチ」とありますが、この「地域」とはどの規模になりますか？

委員長職務代理者：

今は小学校区でイメージしています。ただ実際に生活支援の取組を行っている単位については、小学校区よりももう少し小さな自治会の単位でされているところもありますが、アプローチについては小学校区で考えています。

委員長：

介護保険では日常生活圏域が中学校区と設定されていますが、実際には中学校区では大きすぎるため、町内会や自治会といったように、より小さな規模の方が理想と言われています。この議論の中では小学校区かもう少し小さな単位で考えたいと思います。そして中学校区でまとめられるものはまとめていくというように、小さなところから大きく広げていくという形でどうかと思います。

まず集いの場をどう設定するか考えたいと思います。一つは高齢者の孤立防止かと思いますが、他にも皆様の中で集いの場をどういう場にしていくかというイメージはありますか。また、集いの場でできないところは、どんな場をつくっていくのかといった意見をいただきたいです。

美馬委員：

私たちの地域では、自治会の集会所が一番集まりやすいと思います。もっと細かく言えば、個人の家になると思います。

委員長：

「居場所」というと、1990年代までは物理的な場、公民館等を指していたのですが、2000年以降は精神的な空間も含めて「居場所」となってきました。一つは物理的な場所ということと、もう一つはどういう場にしていくかということを議論できればと思います。

新宅委員：

先日、担当の地域で「集いの場」とか「サロン」とか銘を打ったものではなかったのですが、市民ホールに集まってテレビでオリンピックの中継を見ていたことがありました。そんなに大きなテレビではないのですが、高齢者の方も集まり、皆で盛り上がっていました。スタッフといった方は誰もいません。勝手に集まっていると言えば聞こえが悪いですが、「あそこに行けば皆に会えるし、皆で応

援しようか」といった雰囲気だったかと思います。集いの場は委員長も仰ったように、形としてあるものと、空間として同じ思いでいるというのと、「行けば誰かいるだろう」という期待も含めた場ということかと思います。福祉委員会が取り組んでいるサロンというのは、まず福祉委員が色々なプログラムを準備して会場を用意してといった活動が主ですが、今回のようにふらっと立ち寄って皆で過ごすというのも、自然でいいなと思いました。

F委員：

集いの場へ行ったことのない人にとっては、どういう形で入っていけばいいのかといった思いが強いです。ただ場所が与えられて、いつでも誰でも来てくださると言われても、そう気楽には行きにくいです。すでにグループが出来上がっているようなイメージもあります。食事会等もいい活動だと思いますが、初めての人にとっては敷居が高いかもしれません。例えば講演など何か一つのテーマで一度集まれば、2回目からは気楽に行けるのではと思います。

委員長：

最初の一步をどうするかという時に、介護保険を学ぶ場とか、健康体操を学ぶ場とか、認知症について学ぶ場など場面設定をしてから始めるという、そういう色々な集いの場があるといいですね。

G委員：

五月が丘の自治会で庭先カフェというものをされています。自治会の有志でされていて、誰でも参加できるようにオープンにされています。天気が良ければ椅子を持って公園の近くに集まり、お茶を飲んで過ごされています。それが良い活動だと思うのは、クローズにしていないところです。雨の日に自宅のガレージを使わせてくれる人もいるそうで、色々とアイデアを持ち寄りながらずっと続けておられます。それがうらやましくて、自分の地域でもできないかと考えています。

私は個人で2年前から「井戸端会議」という集いの場をつくっています。一人100円で借りることのできる場所があるので、1か月に1日だけ借りています。PRは口コミとフェイスブックで行っています。参加者が夫や友人を連れて来てくれることもあります。来たくなるような雰囲気を皆様がつくっておられると思います。この春からも一つ、ふらっとサロンをお借りしてご飯を食べる場をつくらうとしています。旬を楽しむということで食材を持ち寄って、ご飯と味噌汁を用意するものです。誰が儲けるということもないですが、集いの場づくりの提案をしていって、後世に繋げたいと思っています。40代くらいの方が手伝うと言ってくださっているのです、そこからスタートかと思っています。

委員長：

今までは小学校区など地縁型が中心でしたが、料理や音楽やカフェなどテーマを設定して自発的に集まるというアソシエイト型やテーマ型は、新しい担い手づくりという議論にも繋がりますね。

G委員：

特に男性にも参加してもらいたいのですが、退職してから外へ出て行きにくいということが多いと思います。

委員長：

東大阪の例ですが、男性の料理教室を開催した際、あまり外出のなかった男性をお誘いすると、その方がもともと板長をしていた方だったそうです。それまで家でテレビとお酒がお友達だったのが、それ以降は積極的に教室へ参加するようになったそうです。

もう一つ、ONCC（大阪北部コミュニティカレッジ）での例ですが、両親のために自分で健康体操を覚えて、週に1回3~4人に集まってもらい、両親も含めて皆で健康体操をしている方がいるそうです。そういう個人の思いも大切かと思いました。担い手づくりにも繋がる話かもしれませんが、一人の発信から広がるタイプと、小地域で行っていくタイプ、それから認知症カフェのように当事者と周りを巻き込んでいくタイプなど、色々工夫ができそうですね。

H委員：

地域包括支援センターはいきいき百歳体操やはつらつ体操教室の支援をさせていただいています。はつらつ体操教室は終了後にOB会として自主グループが立ち上がるのですが、その活動が軌道に乗るまで支援させてもらっています。岸部地域では今7か所の自主グループが立ち上がっています。自治会単位で行われているものはその自治会の方のみの参加になりますし、例えば高齢者いこいの家で行われているものは誰でも参加できるようになっています。このように、健康づくりから自主グループが立ち上がり、そこへ賛同する人が増えていくというような集いの場のあり方も良いと思います。

委員長：

堺市の地域包括支援センターの事例報告で、短期集中のサービス利用後についてというのがありました。

H委員：

吹田市にも訪問型短期集中サポートサービスというのがあります。自宅に作業療法士が訪問し、自宅の環境を見たり、デイサービスを併用したりして、3か月か6か月でお元気になられたら終了というものです。

委員長：

堺市の報告では、そのサービス利用終了後にも通えるよう、サービス終了少し前から同じ地域の人も一緒に健康体操を覚え、皆で継続している地域があるということでした。地域の人も巻き込まなければ、短期集中のサービス利用終了後また元に戻ってしまうので、そのための作戦みたいです。

C委員：

そういった方を地域の住民にお任せするというのは、可能だと思いますか。

H委員：

はい、可能だと思います。例えば公民館を紹介して一緒に行かせてもらって、そこで本人が参加できる活動や講座があればご案内して、継続的に通えるように地域の方と顔合わせするなど、地域でその方を支えられるような支援ができればと思っています。

C委員：

高齢者と言っても幅広いですから、ここで議論する対象を例えば 75 歳以上で独居の方という風に決めるのか、それとも全体的に考えるのか。食育のような講座をすればたくさんの参加がありますし、そうやって参加できる人は問題でないと思います。なかなか参加しない人に対してどう情報を伝えていくのか、広報にもっと力を入れなければと思います。場所があっても人が来なければ意味がありません。私の地域で以前取り組んだのが、7 月後半から 9 月まで熱中症対策としてスーパーの中にスペースをお借りしました。地域で 100 人以上が手伝ってくれましたし、普段あまり外出していないのか顔も見ることがないような人が来て、涼みながら家のことなど話をするのです。とても良かったのですがスーパーが無くなってしまい、数年で終わってしまいました。場所として望ましいのは、スーパーのように誰もが行くようなところだと思います。そういう場所を掘り起こすには、企業の賛同も必要だと思います。

委員長：

対象者の話ですが、例えば要介護の方は専門職に任せるべきですし、対象としては、要介護になりやすい要支援の方々や、家からあまり出られない方々というのが一点。もう一点はいわゆるアクティブシニアという、お元気な高齢者の方に社会参加や社会貢献をしていただくことで健康寿命を延ばしていくという、二つの柱で考えていければと思っています。地域の中でも色々な力をもっている方がいらっしゃいます。例えば地区福祉委員や民生委員の方など地域貢献されている方はご高齢でもお元気だったりします。それと、そのままでは要介護になってしまいそうな方に対して健康づくりや生きがいづくりを提供していくという、2つの層を視野に入れながら考えていきたいと思っています。

C委員：

今お困りの方がどこに住んでおられるかを私たちは知る術がありませんが、行政はある程度把握しておられます。以前の協議会でニーズ調査の報告がありましたが、本当に困っている人の本当のニーズを拾うことができたかという、そうではないと思っています。

委員長：

そのニーズを一番発見しやすいのは、近所の人だと思っています。その近所の方をどう巻き込んでいくかということがポイントです。最初の第一歩として学びや健康づくりという話題が出ていましたが、例えば施設やデイサービスの作業療法士さんが関わっていくことで、最初の第一歩ができることもあると思います。あと集いの場というのは、集まって元気になる場と、情報交換の場にもなると思います。例えば「あそこのおじいさんが最近少し元気がない」といった話が出た時に、専門職がどこまでその声を拾うことができるかですね。地域包括支援センターがお持ちの要支援者の情報も大事ですが、それを地域に出すというのは個人情報の問題でもあり難しいので、地域の声を専門職がきっちり拾い上げる仕組みづくりも検討できればと思います。

E委員：

サロンの方へは私たちCSWがことあるごとに寄せていただいています。その時に「最近こんなことがあった」といった、高齢者同士でポロっと出た愚痴が、私たちの一番の情報源だと思っています。時には私たちが詳しく聞こうとする前に、高齢者同士で「それなら今度私も行くから、聞いておくれよ」という会話になっていたりします。これは今まで議論してきた、集いの場での助け合いの一つだ

と思っています。買い物や洗濯など目に見えた助け合いではなく、住民同士の情報のやり取りが自然とされています。そこにCSWも加わることで専門的なアドバイスができると思いますし、フォローはしっかりとしていくつもりです。サロン活動は楽しむ場でもありますが、大事なのは知り合った中での愚痴の言い合い、それにいかにアンテナを張ってキャッチするかだと思っています。ただ初めて参加される方にはハードルが高いというご意見もいただいていますので、例えば地域包括支援センターの職員が同行するとか、近所の方が声をかけてくださるとか、そこは福祉委員さんや民生委員さんの方がよくご存じだと思います。

I 委員：

民生委員は専門家ではないので、集いの場へCSWさんに来ていただいて相談できるというのは、非常に効果があると思います。専門家がいるという安心感があると、参加しやすくなると思います。私の場合はCSWさんが来られたら必ず紹介し、何か困り事があれば必ずCSWへ繋いでいくということを心がけています。

場所については、私の地域では公民館と自治会館とがあるのですが、自治会に入っておられない方が非常に多いので、自治会館で開催されるものには行きにくいようです。そこで公民館で開催しようとしても、すでに空きがなく、借りるのが大変なのです。公民館では講座や団体の活動が多くあり、そこへ来ておられる方は非常に意識が高いと思います。公民館の少しでも空いた時間について活用できないか、考えてみたいです。

委員長：

高齢者の方が4層くらいに分かれているかと思いました。一つ目は消極的な方、必要な支援を遠慮される、消極的層。二つ目はお元気でそういう活動に関心のない、無関心層。三つ目は色々な活動に参加されている、参加層。四つ目は福祉委員や民生委員といった参画層。この4層を想定して、どの層にどうアプローチしていくかを整理していければと思います。例えば消極的層についてはCSWや地域包括支援センターなど専門職が関わるものですし、無関心層については興味をもってもらえそうなものを考えて参加層へ繋げていく、参加層には健康づくりなどさらに色々な提案をしたり、参画層へ巻き込んでいく作戦を考えるなど。担い手づくりにも繋がると思います。

次にこの時間からは、担い手づくりについて話し合いたいと思います。ご提案や解決すべき課題など何でもいいので、お手元にお配りした付箋へ書き込んでいただきたいです。1枚の付箋につき1つの御意見をお願いします。5分間とります。

(5分間の記入時間)

J 委員：

各地域で開催される研修会や勉強会での「地域サポーター」的な募集。なかでも「こういうことがしたい」という住民サポーターや、「こういう人がいる」という情報提供サポーターなどです。

K 委員：

担い手の方に興味をもってもらえるような内容の集いの場。短時間でも自由に参加できるようにすれば担い手として参加しやすいのではと思いますが、そうすると担い手のいない時間帯がでてくるの

ではという課題もあります。担い手になるのは、何にでも興味があり、気持ちの強い方がいいと思います。

F委員：

特別に担い手を養成するのは難しいと思います。食事会や集いの場に来られた方の中でも、十分お元気ではつらつとした高齢者の方がいらっしゃるので、そういう方にお声掛けしていく方法が良いのではと思います。

A委員：

担い手として参画することによって、誰かのためではなく自分が楽しい、友達ができる、元気になる、学べるといったメリットをアピールできればと思います。委員長職務代理者が、シニア世代のための活動場所一覧の作成に取り組んでおられますが、そこに説明だけでなく「こんなことが良かった」という参画者の声があればと思います。そういった情報を、これからのアクティブシニアの方に届けるには、ネットの活用も良いのではと思います。60代や70代の方の興味関心がどこにあるのか、私もよく分かっていません。と言うのも、介護予防の話をしていた時に「まだまだ自分には関係ないし、辛気臭い」という反応だったのです。実際には介護予防に取り組んでいただければ効果はあるのですが、そのネーミングが良くないようです。どういった言葉に関心をもってもらえるのかマーケティングしなければ、人は集まってこないと思います。

E委員：

サロンでの参加者はスタッフという風に発想を変えるのも一つかと思っています。しかし参加者にいきなりお茶運びをしてもらおうといったことではなく、例えば飲み終わったコップはまとめておいてもらうなど、ちょっとしたことから段々セルフサービスにしていくなどです。そういった手伝いをさせていただくことで、福祉委員さんには違うところで力を発揮してもらえるのではと思いました。

H委員：

集いの場でリーダーシップを発揮されている方に何か役割をお願いすることにより、その方のモチベーションが上がり、別の場でも力を発揮されるのではと思います。また、高齢者の特技を活かすような場をコーディネートすること。あと、昨日地域ケア会議の研修会があったのですが、そこで「ボランティアや近所付き合いをしている方は健康感が高い」というデータがあると聞きました。人と人、人と社会を繋げることが健康づくりに役立つということをもっと広報できればと思います。生活支援の部分で、集いの場でお互いに助け合える仕掛けづくりとか、そういう取り組みに共感していただける方を見つけて仕掛けづくりができればと思います。

L委員：

全ての事業所ではないと思いますが、地域貢献したいと思っている事業所は多いと思います。ただどうすればいいか分からない。集いの場のようなカフェを設けたとしても、なかなか人が集まらないですし、できれば地域の人と一緒に参画してほしいというところも多いと思うのですが、どう巻き込んでいくのか、巻き込めるのか、一緒にできるのかを模索する中で、多くの事業所が踏みとどまっています。あとケアマネジャーとしては、ちょっとした支援を気軽に頼める人が身近にいたらすごく助

かる方が多いです。また、サービス利用の手続きも面倒臭く感じてセルフネグレクトになっている方も多いと思うので、本当にちょっとした支援を気軽に頼めるような仕組みがあればと思っています。

B委員：

あまり難しく考えず、困り事が出てきたら助け合える単純な仕組みにしたいと思っています。新たなスタッフを募集するのではなく、ボランティアを前向きに考えてもらえるように、身近に感じてもらえるように考えていきたいです。

I委員：

いきいき百歳体操の取組がとても良くて、私の知っているグループはいつも満員になっています。健康につながるということで、自主的に取り組む方が多いのです。担い手を増やすことも、健康をテーマに考えると、とっつきやすいのではと思います。そこへ仲間を誘う方もいると思います。

あと福祉委員を決める時には、自治会から出してもらうように呼びかけています。初めは嫌がっていても、地域の活動に参加してもらおうと「やって良かった」という声が多く聞かれますし、今後も福祉委員でなくてもボランティアとして続けるという方もいらっしゃいます。自治会の活用は考えてもいいと思います。

C委員：

一定の年齢になれば全員福祉委員になるのがいいと思います。担い手はお願いしてもなかなか見つからないものです。今までの自治会活動の中で分かってきたことなのですが、半強制的にお願いして反発を受けることもあります。それでも続けていくと、とても和やかになるものなのです。もし支援の対象となる人のデータがあれば、自治会の役員だけでも把握できればと思っています。一昔前のご近所同士の助け合いを実現できれば大部分の問題が解決できます。これだけの人が困っているのだと地域に示すことができれば、話が早いと思います。

G委員：

親のことで困っている人は多くいるのですが、そういった人にアプローチして集いの場に来てもらい、それから親も連れて来てもらうというように繋がりをつくっています。高齢者に限らず、集団が好きでない人はいらっしゃって、皆で体操なんて嫌だと言ったりするのです。しかし、そういう人ほど実は良いものをもっていたりするので、活動に来ていただきたいと思っています。私は本人でなく子や友達など周囲に働きかける方法をとっています。

D委員：

私の所属するボランティア団体では、何か困り事があれば5～6人組で活動に向かっています。団体に参加している人はいいのですが、そうでない人もいます。近所に要支援くらいの人が出て、非常に困っておられるのですが、地域包括支援センターに伝えましょうかと声をかけると、嫌がるのです。近所の人でも手伝いたいと思っているので、そういった人たちをまとめて本人をサポートできる仕組みがあればと思います。福祉委員さんの耳にまだ入らないくらいの段階で、近所の人たちは気付いているので、そこをうまく活用できればと思います。あと食事会などを今は福祉委員さんがしていますが、そのお手伝いを他の人にも募っていけば、もっと活動が広がると思います。

委員長：

これまでの話をまとめると、4つの層のうち無関心層と繋がりを持ち、参加しやすいようなメリットを発信することが大事だと思いました。サポーター養成やシニアリーダー養成講座の話も出ましたが、和歌山では「地域コーディネーター」という名前でアクティブシニアのプライドをくすぐりながら地域づくりのお手伝いをしていくということをしています。これは校区福祉委員との連携も必要になってくると思います。あと、活動を実際に体験してもらうために、福祉委員の選考について御提案がありました。活動に参加するメリットとして例えば健康づくりを強調していくということも大事ですね。そして事業所の専門職は、認知症や介護保険などの情報を教えられるスキルをもっており、地域には学びたいという人もいますので、そこにコーディネートが入る形になれば、お互いにメリットがあるという話も出ました。

[その他の案件①：「支え合いの地域づくりフォーラム」～困った時は「お互いさま」の地域を目指して～（案）について]

委員長職務代理者：

（市民向けフォーラム開催案の報告）

[その他の案件②：吹田市高齢者生活支援体制整備協議会 愛称の検討について]

委員長職務代理者：

事前に愛称の案を募ったのですが、まだ少ししか集まっていないので、また次回までに考えて案を提出いただけますでしょうか。来年度第1回の協議会で決定したいと思います。吹田市の施策では今「高齢者」や「シルバー」といった言葉でなく「年輪」という言葉がよく使われているので、ご参考にさせていただければと思います。

[その他の案件③：来年度の協議会について]

来年度も4回の開催を予定しており、第1回は6月頃で考えております。無関心層に対して具体的にアプローチを実践していくための作戦会議の場にしたいと思っています。また、31年度に向けて地域型の生活支援コーディネーターについても検討していきたいです。

事務局：

次回、来年度第1回の協議会につきましては、6月頃を予定しています。委員の皆様の任期が2年間ということで、8月までとなっておりますので、来年度第1回は引き続きこのメンバーでお願いいたします。日時と場所が決定次第、委員の皆さまには御案内をお送りいたしますので、よろしくお願いたします。